

事業の名称

# 『レインボーミラクル for チャレンジド』 美術科と特別支援学校による連携の試み

〔事業責任者〕

(自治体等側)

茨城県立北茨城特別支援学校 校長 永井 立雄

(大学側)

教育学部 准教授 片口 直樹

## 事業テーマ：地域の教育力向上

### 連携先

茨城県立北茨城特別支援学校  
茨城大学教育学部

### プロジェクト参加者

片口 直樹 (茨城大学教育学部 准教授)  
担当：プロジェクト統括責任者)  
永井 立雄 (茨城県立北茨城特別支援学校校長)  
担当：プロジェクト事業責任者)  
蛭田 清子 (茨城県立北茨城特別支援学校教諭)  
担当：プロジェクト実施責任者)

### プロジェクトの実施概要

#### ①プロジェクトの目的

学校教育において子どもの主体的な表現力を引き出す事はこれまでも重要な課題となっており、自らの生活を豊かにし、たくましく生きる為の人間育成には欠かせないものであると捉えられる。北茨城特別支援学校では、この問題意識をもとに、特性に応じた様々な造形活動を取り入れているが、実際には生徒一人一人の個性を引き出せているか、教員の誘導によりありきたりな表現になっていないか等を危惧する現状があり、個々の表現力の向上を目指した教育内容については課題とされていた。

そこで、美術教育の分野から、絵画による造形ワークショップ活動を研究対象として実践している片口直樹教員と連携し、新たな試みによる課題解決を目指すこととした。片口は過去に常総市立

大生小学校(2014年)や大阪市立鷺洲小学校(2009年)等より同様の依頼を受け、造形ワークショップ活動を行ってきた実績があり、スムーズな事業展開が予想された。

以上のことから、特別支援学校の絵画制作活動において、児童生徒の表現力が向上し、描く喜びや伝えたい気持ちを高めるための題材や場の設定方法、支援の在り方等を探ることを目的とした。また、本事業により教育現場におけるワークショップ活動の今日的な課題を明確にし、障害児教育と美術教育の分野を超えた可能性を示唆したいと考えた。

#### ②連携の方法及び具体的な活動計画

##### (1) 連携における事業者役割

自治体側：校内で活動の対象となる生徒を選定し、その特性や配慮点をもとに共同で内容を企画する。また、円滑に事業が進むよう場所の設定や補助具の準備等、活動環境を整える。さらに、作品の展示や活動記録の放映等について、展示場所の確保や告知など学校内外に活動の情報公開をする。

大学側：本事業について様々な視点からの調査、課題内容の精査を行い、具体的な活動内容を立案する。また、学生参加者の手配や活動の記録を行う等、実質的な運営を行う。報告を兼ねた作品展示会を学内で開催し、最終的にはDVD付き冊子(ビジュアルブック)を作成する事で、広く普及し、その意義について訴求する。

## (2) 対象学校と生徒の選定について

茨城県立北茨城特別支援学校は、茨城県の県北に位置する知的障害の学校である。児童生徒は135名（訪問教育5名を含む）、小学部50名、中学部36名、高等部49名である。児童生徒の実態は、重度重複障害があり常時介助が必要な児童生徒から、外部の中学校から高等部へ入学し一般企業に進む生徒までさまざまである。美術における表現方法についても、教材を用いて感触遊びをする段階から自分の感じたことや思いを描画することができる生徒まで、さまざまである。

本実践では中学部1年生14名を抽出した。小学部から高等部の中間でありワークショップを行うにもちょうどよい人数であることや、障害の状態が比較的軽度である生徒の割合が高く、言葉による説明を理解したり相手を意識したりすることが比較的しやすいことから対象とした。しかし、知的障害は軽度でも発達障害や場面緘黙があったり、家庭的に問題を抱えていたりなど、さまざまな困難を抱えている生徒が多い学年である。また、外部の小学校から入学・転入した生徒が5分の1である。これら対象生徒を絞って行うことで何かしら成果が看取りやすいのではないかと考える。

## (3) 具体的な活動計画と全体像

本事業では「絵画」を軸とした芸術体験を実践する二つの取組みを計画した（表1）。一つは、中学部1年生を対象に本学学生とのコラボレーション作品を制作するものである。具体的には、各自が描いた絵の上に何度か郵送を繰り返し交互に描き入れていくものであり、作品の完成まで互いを明らかにせず、そのプロセスを楽しむものである。もう一つは、大学側事業者である片口が参加生徒と共同で一枚の絵画を制作するものであり、時間を共有することで生まれる新たな美的観念の構築を図るものである。

これらを『レインボーミラクル for チャレンジド』と題し、段階的な取り組みとして9・10月での実施、11・1月での発表を予定した。

表1 『レインボーミラクル for チャレンジド』

項目	活動内容	
名称	つながるアート	にじのたね in キタトク
方法	交換して描く絵	共同で描く絵
目的	表現力の向上 「描く喜び・伝えたい気持ちを引き出す」	
主題	自分の感じたもの、描きたいものを描く	
画材	水溶性絵具等、キャンバス（53×62cm）	絵具、クレヨン、キャンバス（180×540cm）
方法	特別支援学校の生徒と大学生がキャンバスを郵送し交互に絵を描き入れる。生徒側には「相手は魔法使い」と説明。学生側にも生徒の情報を入れない。3名の学生が一人4～5名の特別支援学校生徒の絵を担当。	片口が進行役（ファシリテーター）となり、教育学部美術選修の大学生・院生8名が補助者として生徒14名と共同作品を制作する。
日程	2014年9月～10月	2014年10月21日
場の設定	中学部1年生教室において、通常は授業を担当しない教員（蛭田）がゲストティーチャーになり進行。大学では絵画室を使用して制作。各2回実施。	特別支援学校体育館。第1部「つながるアート」のまとめ（魔法使いとの対面）と第2部「にじのたね in キタトク」（前半と後半に分ける）を一日で実施。
支援方法	受容的態度で見守り、賞賛したり許容したりする言葉かけを心掛ける。生徒の選択や意思を大切にすることを教員間で共有。	画家の技術を見せる。落ち着いた語り口による受容的な態度や賞賛、リラックスした雰囲気を中心掛ける。教員は基本的に指示をせず見守る。
教材の工夫	本格的な描画材（キャンバス・アクリル絵の具等）を使用する。導入において、予め制作した下地により発想を促す。	大きなキャンバスを使用。アクリル絵の具をバケツに用意し、床にはブルーシートを設置。服装は汚れてもよいものを着用。

## ③期待される成果

特別支援学校における芸術（絵画）を通じた実践的交流により、生徒の描く喜びや伝えたい気持ちが引き出され、通常の授業では味わえない美術の醍醐味や魅力を実感し、結果、表現力が向上されると期待できる。また、教育学部の学生を実践

者あるいは補助者として参加させることで、相互教育が可能となる。

## プロジェクトの実施成果

### ①活動実績

#### (1) 「つながるアート」の実践

【期間】9月1日～10月21日、期間内で特別支援学校、大学共2回ずつ制作

【場所】北茨城特別支援学校中学部1年教室、茨城大学教育学部絵画室

【参加者】特別支援学校中学部1年生14名  
大学教育学部2年生3名

【内容】表1、図1・2参照

#### (2) 「にじのたね in キタトク」の実践

【期日】10月21日（火）10：30～14：15

【場所】茨城県立北茨城特別支援学校体育館

【参加者】特別支援学校中学部1学年14名、片口、大学生7名、院生1名

【内容】表1参照

#### (3) 文化祭（キタトク祭）での作品展示会開催

【期日】11月15日（土）9：00～14：00

【場所】北茨城特別支援学校プレイルーム他

【作品】絵画15点、映像1点

【内容】本事業による作品とその趣旨を来場者（地域の人々等）に訴求する。

#### (4) 大学内での作品展示会開催

【期間】1月6日（火）～11日（日）

【場所】茨城大学図書館一階展示室

【作品】絵画15点、映像1点、写真2点

【内容】本事業による作品とその趣旨を来場者（大学関係者等）に訴求する。図3参照

#### (5) 展示会におけるギャラリートークの実施

【期日】1月8日（木）17時～18時

【場所】茨城大学図書館一階展示室

【登壇者】蛭田清子（特別支援学校教諭）

青柳路子（大学教育学部准教授）

片口直樹（大学教育学部准教授）

【内容】事業企画者の視点と学校教育の視点から全体の活動を考察する。

#### (6) ビジュアルブックの制作・配布

【期間】2月～3月

【内容】事業内容を映像、写真、テキストで構成した冊子にまとめ、関連機関に送付する。

### ②プロジェクトの達成状況

#### (1) 表現力の向上

二つの実践を通じた生徒の様子からは、絵画活動において描く喜び、伝えたい気持ちが引き出され、表現力の向上が見られた。

「つながるアート」には、自分一人の絵画制作では体験できないものがあった。生徒たちにとって初めての教材を使用することで、技術的にも新たな視点で線描や彩色をすることができていた。交換して絵を描き進めるといった試みにより、作品が変化していく面白さや嬉しさを感じ、相手とのコミュニケーションを楽しみながら、新たな絵画の魅力を発見したようであった。

「にじのたね in キタトク」では、巨大なキャンバスに素手で描くというダイナミックな活動であった。体全身で描くことで生まれた思いがけない絵の具の表情は、参加者全員の感性を大いに刺激したようである。前半の動的な作業に対し、後半は個々が気持ち良く活動できる静的な環境を設定し、それぞれの居場所を感じながらもお互いの良さを認め合い共有するといった、言葉を介さずとも色や形でコミュニケーションする楽しさ、心地よい一体感を創出することができた。通常の授業では味わうことができない貴重な絵画体験により、個々の「情緒の解放」が見受けられた。

#### (2) 自己肯定感の高まりと居場所

「自己肯定感の高まり」と「居場所があることの大切さ」の重要性が浮き彫りになったことが、特別支援学校で行った意味として大きな成果であったといえる。

対象の中学部一年生は、知的に軽度だが場面緘黙や発達障害がある等、外部の小学校から入学した生徒の割合が高い。これら自己肯定感の低さや自己表現への自信のなさから積極的になれなかったり反抗的な態度をとったりする様子が見られる

生徒において、自己肯定感の高まりや表現意欲の向上が見られたことで、通常の小・中学校における特別な配慮を必要とする児童生徒に対しても有効な支援になるといえるのではないかと考える。

### (3) 場の設定について

「つながるアート」は9月から10月上旬にかけて実施したが、そのまとめとする魔法使い（大学生）との対面を、「にじのたね」を実施する当日に設定した。

「つながるアート」を行うことが「にじのたね」を実施する際の良い前段階となり、移行がとてもスムーズに行われた。「つながるアート」で新しい絵画の手法や題材を体験し、当日は魔法使いの正体が分かった高揚感の後に「にじのたね」の共同作品を制作したことで、より一体感が増し、効果的な活動を行うことができた。生徒たちにとっては、『レインボーミラクル for チャレンジド』の二つで一つの内容を、一日で体験できた特別な一日となった。

### (4) 大学生と連携した効果

連携の実践において、教育学部美術選修の学生を参加させたことで、生徒や生徒の作品に関わる際に、生徒理解や接し方においてある程度の基盤ができていたといえる。

「つながるアート」では関わった学生が将来の図工・美術教師ということもあり、生徒の絵を受け入れ、生かし、喜ばせたいという気持ちで描いてくれたのではないだろうか。それが生徒にも伝わり、「自分の絵が受け入れられ、大事にされた」という満足感と、「予想以上の上手な絵になって戻ってきた」という自分の絵が美化された感覚とで、「自己肯定感の高まり」や「やりとりした達成感」が促されたのではないかと考える。年齢的に近く、絵画の技術的なスキルがある学生の描く絵は、特別支援学校の生徒たちにとって、絵へのあこがれや刺激となり意欲を引き出す効果があった。

一方、大学生にとっても教育実践を体験する良い機会であったといえる。「つながるアート」は3名の学生で実施したため、一人が4～5名の生

徒を担当することになり、負担は大きかったが、生徒一人一人によって違いがあることがよく実感でき、それぞれにどのように対応して描くかという点でとても考えさせられたのではないだろうか。一人一人の個性や特性に応じて描き方や絵の内容を変えらるということは、小・中学校、高等学校のどの教育現場においてもとても大切な要素である。14名の生徒に14名の大学生が一人ずつ担当したならば、経験できなかったことである。

「にじのたね」実施時には、大学生・院生8名がスタッフとして参加し、前半は絵の具の準備等の補助的支援にあたった。後半は一緒に絵を描く等し、その際は自然と許容する態度を維持しつつ、肯定的で賞賛する言葉かけに努めていた。また、自ら楽しんで描いている様子があり、それらは、全体での温かな一体感を作り出すことにも成果を上げていた。

### (5) 教員の意識改善

全体を通し、特別支援学校担当教員には「生徒の気持ちに任せ、教員が誘導することがないように見守る」ことに意識して取り組んでいただいた。通常の美術活動よりも教員からの支援が少なくなったため、どうしたらよいか迷う生徒や、自分から描き始めることに難しさがあつた生徒もいたが、最少の言葉かけにとどめ、無理強いせず、受け入れ、見守るように対応することで、生徒の作品やその表情にも通常にない反応が見受けられたようである。重度重複の障害のある生徒に対しての支援法に関しても疑問視し、なるべく本人の動きで活動できる支援の仕方を検討した。これまで、いかにテーマに沿って形を整えようと促したり、言葉かけ等で誘導したりすることが多かったか、無意識に支援の手を出しすぎているのではないかと考察する良い機会になった。

例えば、否定的な行為を教員が止めようとした一例がある。「つながるアート」において、制作過程にあつた絵を塗り潰した生徒がおり、当然のように制止したが、遅かつたようである。しかし、交換して戻ってきた絵は塗りつぶした部分を生かした面白い絵になっていた。これは、潰したり壊

したりした後、新しい表現が生まれる可能性は無限にあることを示唆している。このことから、生徒本人から出てきた表現を教員側の意図で無理に誘導したり止めたりせず、生徒が心地よい状態で描けるように環境を整えることが大切なのではないかといえる。

#### (6) 連携の意義

実践で刺激的だったことは、連携を模索する中から新しい視点が生み出したことであった。例えば、「つながるアート」の導入において、絵を交換する相手を会ったことのない「魔法使い」と設定したことや、生徒が使い慣れていないキャンバスを画材にすることで、特別感が増し、生徒の意

欲向上につながったといえる。また、予め下地に白色を施す事によって生まれた凹凸やグラデーションに視点を向けたことは、発想の転換をより自由な方向へと導いた。これらは連携により生まれたアイデアであった。

「にじのたね」においても同様であるが、より専門的な知識や経験は、このような実践を通じた連携の中で初めて生かされると実感した。

#### (7) 表現に欠かせないもの

今回の連携を通して、魅力的な題材の仕掛けや本物の良さに触れ、意欲を引き出す設定が、技術力そして表現力の向上には効果的であることがわかった。同時に、「気持ちを解放し、安心して活



図1 「つながるアート」作品①



図2 「つながるアート」作品②



図3 大学内展示会用フライヤー

動できる雰囲気づくり」が表現活動をする際の心の基盤として大切であることが確認できた。「自己肯定感の高まり」と「居場所があること」の心地よさが、心の幹を太くし、自らの内面を表現しようとする動機付けになる。そして表現力の向上につながるといえる。

あらためて一年間の活動を振り返れば、「つながるアート」が「心の解放」であり、「にじのたね」が「身体の解放」を意味していたと推測できる。これらを段階的に実施したことは、やはり連携により成し得たものであった。そこで、本プロジェクトにおいて以下のような図式を導き出せたことが、最大の成果であったと考える。

#### 「感動→心の解放→身体の解放→表現」

これは、特別支援学校と美術科による連携の試みから得られたものであるが、特別支援学校の生徒に限らず、そして美術分野だけに限らず、「感動」すなわち「心を動かす」ことが「表現」の基盤として存在していることを示していると捉えたい。

### ③今後の計画と課題

今後の課題としては、これらの活動を一過性のイベントとして終わらせることなく、継続する活

動としてどのように年間計画に位置付けていくか、また、どの学年がどのような指導計画で実施するかを検討していくことである。

今回は、「魔法」をしかけのキーワードにして効果的だったが、2回目以降は同じ設定で実施することは難しいであろう。また、発達段階的にみて、相手を意識できるかどうか、障害の程度によって効果に差が出るのが予想される。学年によって実態差が大きいため、学年を限定して実施した際は効果が期待されにくい場合もあると思われる。

しかし、今回の実践結果のエッセンスを、美術活動や表現活動の際に生かすことはできる。特別な配慮を必要とする児童生徒の表現活動において、今回成果のあった支援の方法や配慮を行うことで成果を上げることは大いに期待できるであろう。

『レインボーミラクル for チャレンジド』は、言葉や会話が難しくても、相互のやり取りから生まれる言葉によらない気持ちの共有や相互理解を楽しむことができる活動である。特別な配慮が必要な子、そうでない子、全員が一つの場を共有できる方法としてアピールしていきたいと考える。